

公開授業科目： 「グローバルコミュニケーション」(教養発展科目)
授業担当教員： 教育開発系 リー飯塚 尚子 講師
開講日時・場所： 平成22年7月1日(木) 2限、209 講義室

授業について

「グローバルコミュニケーション」は複数の教員で担当する科目であるが、その半分をリー飯塚先生が担当されており、講義終盤にあたる7月最初の授業を拝見した。講義はパワーポイントを使用して進められ、前回のテーマへの学生の意見を紹介するところから始まった。今回のテーマは「カルチャーショック」で、グループ討議を行った後、代表者が発表を行った。リー飯塚先生からは「カルチャーショックは異文化間で起こり、国内の地域の違いでも起こる」という広い解釈が示されたのは新鮮であった。次に会話において誤解が発生した事例をDIEメソッドにおける描写(D)、解釈(I)、評価(E)で分類しながら解析していった。漫画を取り入れ、なぜ誤解が発生していったのかを、学生に意見を求めながら解説を加えた。話し相手のバリエーションや見方を理解できないために、異なった解釈、評価に繋がっていくことは日常生活でも経験することで、私達も日頃から気をつけなければならないことでもある。リー飯塚先生の「相手の解釈のバリエーションを考えることの重要性」はコミュニケーションの根幹となる重みのあるコメントだった。授業の最後に今後この授業を担当する学外講師とその方の執筆図書の紹介があり、リー飯塚先生の著書も紹介された。リー飯塚先生の経験を述べた著書とのことであったが、リー飯塚先生がどのような経歴と考えを持つ方なのか、学生に先入観を入れずに授業を進めるためにリー飯塚先生担当講義の最終回に紹介したとのことで、授業の進め方に工夫があることがわかった。

討論について

授業後の討論では参加した教員から活発な発言があり、司会者抜きでも意見交換が成立するほどの盛り上がりを見せた。写メールを禁止してスライドの印刷物を配らず、学生にノートを取らせるための時間を確保しているとのことで、一方、他の教員の講義ではできるだけノート取りに集中しないようにしている講義もあり、内容や方針により授業の進め方は異なる。グループは日本人、留学生混成でグループは毎回変えずリーダーはその場で決めていたとのことであるが、的確に意見をまとめるグループが多く、学生の発言も多かった。留学生には日本語をあまり理解できない学生もいるとのことであった。海外実務訓練を意識した授業というわけではないが、学生には意識している者もおり、就職活動に役立ったと話す学生もあるとの発言があった。最近は海外に行きたがる学生が少なく、他大学でも同様の現象が見られ、社会が成熟するに従って学生の意識が縮小均衡型になっているが、この授業の受講者は必ずしもそうではないようである。リー飯塚先生はご自分の経験をあまり述べないとのことで、出席者からは積極的に経歴、経験を述べた方が学生に対し説得力があるとの意見も出ていた。リー飯塚先生の授業はグループ討議を活用した発信型であり、教員が発言を控えることで学生の主体性が授業を通して養われてきている面もある。覚えるのではなく考えることに重点がおかれ、結論だけでなく解決策も取って提示しないことが、多様で活発な意見交換の基盤となっている。

報告書作成者：物質・材料系 前川博史、教育開発系 高橋綾子